

アメリカ人氣質

兎玉 稔

四拾餘年の昔、夏、米國シカゴ市滞在中、郊外ラビニアパークにて高名なるバイオリニスト、イツアーク・パールマンが野外コンサートに出演するを知る。市内事務所に行き入場券を求む。会場まで行く専用バスの仕立てあるを聞き、同時に豫約。當日、最寄り乗車地より乗車す。

このバス、市内各地にて他の豫約客を拾ひ拾ひするうちほぼ席となれり。最後の乗車地點、老人ホームらしき所に停車して數人のお年寄り車内に入り、それぞれ空席を探して座す。されど最後に乗込みたる老婦人、車内いつこにも席を見出すを得ず。手違ひありて、定員を越ゆる豫約を取りしならむ。席あらずして立つ客ある時はバス發車不可の規則あり。運轉手大いに困惑し何處かに架電し相談を繰返す。

この老婦人ただ無表情に運轉手の横に立ち、事態の解決を待つ。予期に反する不當取扱ひなれども抗議の素振りも見せざりき。あるいはご年齢によりその元氣も無きかと推察す。策無きまま徒に時間のみ過ぐ。他の客、何が起きたるかを察知し、バス會社の不手際を非難しつつ、演奏開始時間の迫るを心配し始む。

やがて彼女、遂に思ひ切り、斷念したる様子にて、豫約券を握りしめたるままバスを降り、老人ホーム玄關への道に戻り始む。

その時、余よりも後方の席に居るらしき若者一人、自分が、と大聲を發し、席を譲る、と申し出づ。それを聞くや否や運轉手、席を急に立ちバスを飛降り老婦人を追ひて呼止めその手を引きバスに戻らしむ。

彼女が席につき、入替わりにこの若者、バスを降りんとするも、運轉手、意を決したる面持ちにて、その要なしと斷言、バス内の通路に立つべく促してドアを閉め、規則に背くものともせず發車す。彼、車中に響く大聲にて「乗客諸氏、定員オーバーを會社に密告するなかれ！」と告ぐ。事の成行きを見たる乗客等、これに同意して拍手喝采、口笛するもあり。

定員規則を守らんとする運轉手、規則ならば止むを得ずと諦むる老婦人、自分の席と演奏會を棒に振りても思ひやるの申出せる若者、更に機に臨んでは規則を破る勇氣持つ運轉手とそれを許して激勵する乗客。余、事の次第を興味津々に觀察す。これこの日に見たるアメリカ人氣質の一なり。

さて、バス、演奏會場に到着。降るれば、廣大なる芝生に數多の聽衆既にあり。持參のシートに坐る者、寢そべる者、折疊椅子と机を持込みてワインを飲む者、思ひ思ひのスタ

イルにて開始を待つ。この人等は舞臺や演者への執著薄く、擴聲器から流るる音樂を聴きながら夏の夕を屋外に過すの樂しみのみを得むとするなり。

遙かの前方、ステージに近く簡易長椅子數多あり。一脚に七八人づつの勘定なれば長椅子箇所のみにも千人超を收容するならむ。演奏者パールマンの表情まで見むとせば、その最前列近くに行くべきなれども既に席埋まるは明らかななり。如何せむと思案する時、背後より余に聲を掛る者あり。振向けば年配にして小柄なる女性なり。

何處より來るか余に問う。日本と答ふるに、親切にも余のために席を探さむと言ひて余の腕を取り、舞臺近くまで行く。滿席の客席に向ひて聲を張上げ、「この人、この演奏會を聞かむとして遠路はるばる日本より來るなり。何卒、席を詰めて彼を座らせしめよ」と宣ひき。

否、余は偶々に演奏會あるを知りたればここに居る、このために日本より來るにはあらざりき、とは思へども彼女の好意を無にするは大人氣無ければ沈黙せり。彼女同じ文言を何度も繰返すうち、やがて、一脚の長椅子に割合に優に掛けたるグループが席を詰めて餘裕を作り、招く素振りをす。余、この女性に禮を言い、恐縮しつつその席につかむとするその時、驚く勿れ、彼女、余の横に素早く滑り込て共に座る。彼女、親切にあらずして、余を方便にしてステージに近き席を自ら得むとせるなり。これグループの人等にも意外の展開らしけれども、幸ひにして彼女も余も小柄、頗る窮屈とは言ひ條、押し出さるる人の生ずるなどの仕儀にはならざりき。この日、パールマン氏何を演奏せしかは記憶せず。

演奏終了後、余、窮屈なる思ひをせしめたるグループの面々に詫びと禮を言ふ間、彼女、何事もなかりき如くグッバイと言、歸りの人混の中に消ゆ。余は苦笑しつつ、なほ一面の痛快こそ感ずれ。

これぞこの日シカゴにて見たるアメリカ人氣質の二つ目なる。

以上

(令和四年九月二十七日受附)